現代日本文學全集 [33]

少年文學集

少年文學集

杉浦非水裝幀

改造社版

昭和三年二月二十五日印刷
昭和三年三月一日發行

現代日本文學全集　第三十三篇

著作者代表　鈴木三重吉

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一一一番 一一一二番 一一一三番 一一一四番

株式會社秀英舍印刷

氏明未川小(5) 史女子賤松若、4) 氏軒思田森(3) 氏伴露田幸(2) 氏波小谷巖(1)
氏雄志與島豐(10) 氏二浩野宇(9)氏郎太万田保久(8) 氏秋白原北、7) 氏村藤崎島、6)
氏吉重三木鈴(15)氏雄正山楠(14)氏夫春藤佐(13)氏介之龍川芥、12)氏雀雨田秋(11)

「少年文學集」目次

巻頭寫眞（照影）

敍

巖谷小波篇

こがね丸……四

幸田露伴篇

番茶會談……二七

森田思軒篇

十五少年……六八

若松賤子篇

小公子……一六〇

小川未明篇

牛女……二七〇

金の輪……二七四

殿様の茶碗……二七六

野の薔薇……二七九

幸福に暮した二人……二八一

ある夜の星たちの話……二八五

島崎藤村篇

子供のため……二九〇

北原白秋篇

童謡……二〇九

久保田万太郎篇

「北風」のくれたテーブルかけ……三三六

ロビンのおぢいさま……三四八

宇野浩二篇

蕗の下の神様……三五六

王様の嘆き……三六一

木佛金佛石佛……三六五

聞きたがり屋……三六七

春を告げる鳥……三七一

豊島與志雄篇

天狗笑……三七四

彗星の話……三七八

天下一の馬……三八一

雷神の珠……三八六

秋田雨雀篇

太陽と花園……三九〇

白鳥の國……三九四

老僧と三人の弟子……三九七

啞の殿様……四〇一

酒と痩馬……四〇五

佛陀の戰爭……四〇九

三人の百姓……四一三

監督判事……四一八

先生のお墓……四二三

狐の同情……四二五

牧神と羊の群……四二六

芥川龍之介篇

蜘蛛の絲……四三一

杜子春……四三五

魔術……四四三

佐藤春夫篇

蝗の大旅行……四五〇

美しい町……四五三

楠山正雄篇

マッチうりのむすめ……四七〇

裸體の王様……四七三

おやゆび姫……四七七

天使……四八七

鈴木三重吉篇

古事記物語上……四九〇

古事記物語下……五三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

敍

今の日本の少年文學の運動は、まさしく日本人が一つの世界的な光輝として誇るにさしつかへないものである。今の日本でのやうに、多くの同代のすぐれた作家たちが、そろひ並んで少年文學を負擔してゐるといふことは、未だかつて世界中に見られなかつた特例であり、しかもその作篇の絶對價値から言つても、例へば北原白秋氏の童謡のごとき至純な藝術光が、今世界中のどの國において子供のために、かくも、らんらんとかゞやき上つてゐるであらう。そのほか、創作話篇中にも、事實、これまでの世界中の最すぐれた選作の中に入れても、けつして見劣りのしない傑作を數へ上げることが出來る。わが「現代日本文學全集」のこの一集は、われわれの藝術史、文化史上、空前の劃期をなしてゐる、この世界的の意味をもつた運動の眞價を、ひろくすべての人々の檢討にそなへる機會をさゝげ、かねて、その文學中の代表作を永久に記念するものでなければならない。

日本の少年文學の發達を、年次的に見ると、われ〳〵が祖父母たちから話り聞かされてゐた口碑的な童話をこえて、はじめて文學としての創作話篇に歡喜し得たのは、明治二十四年に出版された巖谷小波氏の「こがね丸」においてである。それ以來、文藝家が兒童の讀物を寄與する風潮がひらけて來た。幸田露伴氏の「番茶會談」は明治四十四年の作で、それ等の寄與の中の代表的な一例である。

その間には多くの西洋の話篇も移し入れられた。その中で明治二十九年に單行本となつた故森田思軒氏譯の「十五少年」と、三十年に單行本としてまとめられた、故若松賤子(本名巖本嘉志子)夫人譯の「小公子」とは、いづれも表現の洗練そのものにおいて、文壇的にも最仰贊された話篇である。「十五少年」はフランスのジュール・ヴェルヌ、「小公子」はアメリカの女流作家フランシス・バーネットの創作である。

以上の發足と刺戟とについで、今の新興少年文學の眞實の先驅に立つたのは、明治四十三年に、たゞ一人、純藝術的創作童話の作集「赤い船」を出した小川未明氏である。ついで大正六年以來、創作家としての私が兒童のために「黄金鳥」以下の世界童話集をかきはじめ、やはり同年、島崎藤村氏が西洋での見聞を語る純藝術的な讀物「幼きものに」を出版されたなぞが機運を作り、大正七年に童話童謡の雜誌「赤い鳥」が創刊された。これを通して今の代表作家の殆んどことごとくを兒童の世界に迎へ入れ、つひに今日の成果を見るに至つたものである。

本集中の諸作篇のうち、巖谷小波、幸田露伴、森田思軒、若松賤子諸氏のものについてはすでに話した。北原白秋氏の童謡の眞價は、私の冒頭の數言によつても大抵想像がつく筈である。同氏には「とんぼの目玉」以下「二重虹」に至る六册の作集がある。小川未明氏は處女作集以後、いよいよ氏獨自の感情と主題とにおいて光を加へ、今では十數册の作集がある。そのほか島崎藤村、豐島與志雄、秋田雨雀、佐藤春夫諸氏の作は創作話として傑出したるもの、宇野浩二、故芥川龍之介兩氏の作は創作的再話の代表的作篇である。久保田万太郎氏の童話劇は西洋の童話又は童劇に取材し、氏獨特の感覺を通して作劇されたもの。楠山正雄氏は多くの創作や再話において輝いてゐる作家であるが、こゝには最近飜譯文學の代表としてデンマークのハンス・アンデルセンの童話が選入されてゐる。

昭和三年二月

鈴木三重吉

こがね丸（まる）

巖谷小波

こがね丸

上巻

第一回

むかし或る深山の奥に、一匹の虎住みけり。幾年月をや經たりけん、軀尋常の犢よりも大く、眼は百錬の鏡に似て、鬚は一束の針を敷き、一度哮ゆれば聲山谷を轟かして、梢の鳥も落ちなんばかり、一山の豺狼麋鹿、畏れ從はぬものもなかりしかば、ます〳〵猛威を逞うして、自ら金眸大王と名乘り、數多の獸類を眼下に見下して、一山萬獸の君とはなりけり。

頃しも一月初つ方、春とは云へど名のみにて、昨日からの大雪に、野も山も岩も木も、冷き綿に包まれて、寒風坐ろに堪へ難きに、金眸は朝より洞に籠りて、獨り蹲まり居る處へ、兼てより氣に入の、聽水といふ古狐、岨傳ひに雪踏み分て、漸く洞の入口まで來たり、雪を拂ひてにじり入り、まづ慇懃に前足をつかへ、《昨日よりの大雪に、外邊に出る事もならず、洞にのみ籠り給ひて、さぞかし徒然におはしつらん。》と云へば、金眸は身を起して、《おゝ聽水なりしか、よくこそ來つれ。實に爾が云ふ如く、此大雪にて外出もならねば、獨り洞に眠り居たるに、食料漸く空しくなりて、やゝ物欲う覺ゆるぞ。何ぞ好き獲物はなきや。……此大雪なれば無きも宜なり。》と嘆息するを、聽水は打消して、《いやとよ大王。大王若し實に物欲くて、食料を求め給ふならば、僕好き獲物を進せん。》《なに好き獲物とや。……そは何處に持ち來りしぞ。》《否、此處には持ち侍らねど、大王些の骨を惜まずして、此雪路を歩みたまはゞ、僕よき處へ案内せん。如何に。》と云へば、金眸呵々と打笑ひ、《やよ聽水。縱令ひ吾老いたりとて、焉ンぞこれしきの雪を恐れん。斯く洞にのみ垂籠めしも、決して寒氣を厭ふにあらず、獲物あるまじと思へばなり。今爾が云ふ處偽ならずば、速かに案内せよ、吾往きて其獲物を取らんに、そは什麼何處ぞ。》と云へば、聽水はしたり顔に、《大王速かに承引たまうて、僕も實に喜ばしく候。されば暫く心を鎭め給ひて、わが云ふ事を聞き給へ。そも其獲物と申すは、此山の麓の里なる、莊官が家の飼犬にて、僕彼には淺からぬ意恨あり。今大王往て他を打取たまはゞ、是わが爲の復讎、僕が欣喜之に如かず候。》と云ふに金眸訝りて、《こは怪しからず。その意恨とは如何なる仔細ぞ。苦しからずば語れかし。》《さん候。一昨日の事なりし、僕かの莊官が家の邊を過りしに、納屋と覺き方に當りて、雞の鳴く聲す。こは好き獲物よと思ひしかば、即ち裏の垣より忍び入りて、窠宿近く往かんとする時、他目慧くも僕を見付て、驀地に飛で掛るに、不意の事なれば僕は狼狽へ、急ぎ元入りし垣の穴より、走り拔けんとする處を、彼わが尻尾を咬へて引もどさんとす。吾は拂て出でんとす。其勢にこれ見そなはせ、尾の尖少し嚙み取られて、痛きこと太しく、生れも付かぬ不具にされたり。かくては大切なる此尻尾も、老人の襟卷にさへ成らねば、いと口惜しく思ひ侍れど、彼は犬吾は狐、とても適はぬ處なれば、復讎も思ひ止まりて、意恨を呑で過ごせしが、大王、僕不憫と思召さば、吾が爲に仇を返してたべ。嚮に獲物を進せんと云ひしも、實は此事願は

ん爲なり。》と、いと哀れげに訴れば、金眸は打點頭き、《憎き犬の擧動かな。よし〳〵今に一攫み、目に物見せてくれんず程に、心安く思ふべし。》と、且つ慰め且つ怒り、嘘に聽水を前に立てゝ、脛にあまる雪を踏み分けつゝ、山を越え溪を渉り、程なく麓に出でけるに、前に立ちし聽水は立止まり、《大王、彼處に見ゆる森陰に、今煙の立昇る處こそ、卽ち莊官が邸にて候が、大王自ら踏み込み給うては、徒らに人間を驚かすのみにて、敵の犬は逃げんも知れず。是には僕よき計策あり。》とて、金眸の耳に口よせ、何やらん耳語しが、又金眸が前に立ちて、高慢顏にぞ進みける。

第二回

茲に此里の莊官の家に、月丸花瀨とて夫婦の犬ありけり。年頃情を掛て飼ひけるほどに、よく其恩に感じてや、いとも忠實に事ふれば、年も久しく盜人といふ者這入らず、家は增々榮えにけり。

降り續く大雪に、伯母に逢ひたる心地にや、月丸は婦諸共に、奥なる廣庭に戯れ居しが、折から裏の窠宿の方に當りて、雞の叫ぶ聲切りなるに、喙々と狐の聲さへ聞えければ、《さては彼の狐めが、又今日も忍入りしよ。いぬる日あれほど懲しつるに、はや忘しと覺えたり。憎き奴め容赦はならじ。》と、雪を蹴立てゝ眞一文字に、窠宿の方へ走り往けば、狐は斯と見るよりも、周章狼狽逃げ行くを、なほ逃さじと追駈けて、表門を出んとする時、一聲噲と哮りつゝ、横間より飛で掛るものあり。何者ならんと打見やれば、こはそも怎麼に吾よりは、二層も大なる虎の、眼を怒らし、牙をならし、爪を反らしたるその有樣、恐しなんど云はん方なし。尋常の犬なりせば、其場に腰をも拔すべきに、月丸は元來心猛き犬なれば、其儘虎に噉てかゝり、喚叫んで暫時が程は、力の限り鬪ひしが、元より强弱敵しがたく、無殘や肉裂け皮破れて、悲鳴の中に息絶えたる、其死骸を嘴に咬へ、あと白雪を蹴立てつゝ、虎は洞へと歸り行く。後には流るゝ鮮血のみ、雪に紅梅の花を散らせり。

雌の花瀨は最前より、物陰にありて件の樣子を、殘りなく詠め居しが、身は軟弱き雌犬なり。且は此程より乳房垂れて、常ならぬ身にしあれば、夫が非業の最期をば、目前見ながらも、救くることさへ成りがたく、獨り心を悶えつゝ、いとも哀れなる聲張上げて、頻りに咆え立つるにぞ、人々漸く聞きつけて、只だ事ならずと出でゝ見れば、門前の雪八方に蹴散らしたる上に、血夥しく流れたるが、只見れば遙の山陰に、一匹の大虎の、嘴に咬へて持て行くものこそ、正しく月丸が死骸なれば、《さては彼の虎めに喰はれしか。今一足早かりせば、おめ〳〵彼は殺さじものを。》と、主人は悶蹈して悔めども、さて詮術もあらざれば、悲しみ狂ふ花瀨を賺かして、其場は漸くに濟ませしかど、濟まぬは花瀨が胸の中、其日よりして物狂はしく、且暮小屋にのみ入りて、與ふる食料も果敢々々敷は喰はず、怪しき聲して啼狂ひ、門を守ることだにせざれど、主人は事の由來を知れば、不憫さいとど增さりつゝ、心を籠めて介抱なせしが、花瀨は次第に窶るゝのみにて、今は肉落ち骨秀で、鼻頭全く乾きて、此世の犬とも思はれず、頼み少き身となりけり。

斯る折から月滿ちけん、俄かに產の氣萌しつつ、苦痛の中に產み落せしに、いとも麗はしき茶色毛の、雄犬只一匹なるか　背のあたりに金色の毛混りて、妙なる光を放つにぞ、名をばそのまゝ黃金丸と呼びぬ。

さなきだに病疲れし上、嬰兒をさへ產み落せし事なれば、今まで張りつめし氣の、一時に弛み出でゝ、重き枕いよ〳〵上らず、明日をも知れぬ

命となりしが、自も覺悟やしけん、兼てより懇意せし、牡丹といへる牝牛をば、裏の牧場より乞ひよせて、苦しき息を喘と吻き、《さて牡丹ぬし、見そなはす如き妾が容體、迚も在命る身にしあらねば、臨終の際に只一事、阿姐に賴み置き度き事あり。妾が夫月丸ぬしは、いぬる日猛虎金眸が爲に、非業の最期を遂げしことは、阿姐も知り給ふ處なるが、彼時妾目前、夫が横死を見ながらに、之を救けんともせざりしは、見下げ果てたる不貞の犬よと、思ひし獸もありつらんが、元より犬の婦たる身の、たとひ其身は亡ぶとも、雄が危急を救ふべきは、云ふ迄もなき事にして、義を知る獸の本分なれば、妾とて心付かぬにはあらねど、彼時命を惜みしは、妾が常ならぬ身なればなり。若し妾も彼處に出でゝ、虎と爭ひたらんには、雄と共に殺されてん。さる時は誰が仇をば討つべき。結句は親子三四して、命を捨るに異ならねば、是貞に似て貞にあらず、眞の犬死とは此事なり。斯くと心に思ひしかば、忍び難き處を忍び、堪へ難きを漸く堪へて、見在夫を殺せしが、此も偏へに胎の兒を、產み落したる其上にて、仇を討たせんと思へばなり。さるに妾不幸にして、云ひ甲斐なくも病に打ち臥し、已に絕えなん玉の緒を、辛く繫ぎて漸くに、今此兒は產み落せども、之を養育むこと叶はず、折角賴みし仇討ちも、仇になりなん口惜しさ、推量なして給はらば、何卒此兒を阿姐の兒となし、阿姐が乳もて育てあげ、彼もし一匹前の雄犬となりなば、其時こそは妾が今の、此言葉をば傳へ給ひて、妾が爲には夫の仇、彼が爲には父の仇なる、彼の金眸めを打ち取るやう、力に成て給はれかし。賴みと云ふは此件のみ。賴む〳〵。》と云ふ聲も、次第に細る冬の蟲、草葉の露のいと跪き、命は犬も同じことなり。

第三回

悼はしや花瀨は、夫の行方追ひ駈けて、後より急ぐ死出の山、其日の夕暮に歿りしかば、主人はいとゞ不憫さに、其死骸を棺に納め、家の裏なる小山の陰に、之を埋めて石を置き、月丸の名も共に彫り付けて、形ばかりの比翼塚、跡懇切にぞ弔ひける。

かくて孤兒の黃金丸は、西東だにまだ知らぬ、藁の上より牧場なる、牡丹が許に養ひ取られ、それより牛の乳を飲み、牛の小屋にて生立ちしが、次第に成長するにつけ、骨格尋常の犬に勝れ、性質も雄々しくて、天晴れ賴もしき犬となりけり。

扨また牡丹が夫文角と云へるは、性來義氣深き牛なりければ、花瀨が遺言を堅く守りて、黃金丸の養育に、且暮心を傾けつゝ、數多の犢の群に入れて、或時は角鬪を取らせ、又は競走などさせて、只管力業を勉めしむるほどに、其甲斐ありて黃金丸も、力量飽くまで强くなりて、大概の犬と噬み合うても、打ち勝つべう覺えしかば、文角も斜ならず喜び、今は時節もよかるべしと、或時黃金丸を膝近くまねき、さて其方は實の兒にあらず、斯樣々々云々なりと、一伍一什を詳り聞かせば、黃金丸聞きもあへず、初めて知る吾が身の素性に、一度は驚き一度は悲しみ、又一度は金眸が非道を、切齒して怒り罵り、《斯く聞く上は一日も早く、彼の山へ走せ登り、仇敵金眸を噬み殺さん。》と、敢圍あらく立かゝるを、文角は雫時と押し止め、《然思ふは理なれど、暫くまづ吾が言葉を、心を靜めて聞きねかし。元來其方が親の仇敵、只に彼の金眸のみならず、他が配下に聽水とて、いと腹黑き狐あり。此奴ある日鷄を盜みに入りて、端しなく月丸ぬしに見付られ、他が尻尾を嚙み取られしを、深く意恨に思ひけん。自己の力に及ばぬより、彼の虎の威を假りて、さては

斯る事に及びぬ。然れば眞の仇敵とするは、虎よりもまづ狐なり。さるに今其方が、徒らに猛り狂ひて、金眸が洞に駈入り、他と雌雄を爭うて、萬一誤つて其方負けなば、當の仇敵の狐も殺さず、其身は虎の餌とならん。是こそ吾から死を求むる、火取蟲より愚なる業なれ。殊に對手は年經し大虎、其方は犬の事なれば、縱令ひ如何なる力ありとも、尋常に噬み合うては、彼に勝んことといと難し。それよりは今霎時、牙を磨き爪を鍛へ、まづ彼の聽水めを嚙み殺し、其上時節の到るを待て、彼の金眸を打ち取るべし。今匹夫の勇を恃んで、世の胡盧を招かんより、無念を怺へて英氣を養ひ、以て時節を待つには如かじ。》と、事を分けたる文角が言葉に、實もと心に悟るものから、黃金丸はやゝありて、《かゝる義理ある中なりとは、今日迄露知らず、眞の父君母君と思ひて、我儘氣儘に過したる無禮の罪は許したまへ。》と、數度養育の恩を謝し、さて更めて云へる樣、《知らぬ疇昔は是非もなけれど、斯く吾が親に仇敵あること、承はりて知る上は、默して過すは本意ならず。それにつき、爰に一件の願ひあり、聞入れてたびてんや。》《願ひとは何事ぞ。聞し上にて許しもせん。》《そは餘の事にも候はず、某に暇を賜はれかし。》《某これより諸國を巡り、遍ねく强き犬と噬み合うて、まづ吾が牙を鍛へ、傍ら仇敵の擧動に心をつけ、機會もあらば名乘りかけて、父の讐を復してん。年頃受けし御恩をば、返しも敢へず之より又、御暇を賜はらんことは、義を辨へぬに似たれども、親の爲なり許し給へ。若し某幸ひにして、見事父の讐を復し、尙此命恙なくば、其時こそは心の儘、御恩に報ゆることあるべし。まづそれまでは文角ぬし、霎時の暇賜はりて……》と、涙ながらに搔口說けば、文角は微笑て、《さもこそあらめ、よくぞ云ひし。其方が云はずば此方より、强ても勸めんと思ひしなり。思のまゝに武者修行して、天晴れ父の仇敵を討ちね。》と、云ふに黃金丸も勇み立ち、善は急げと支度して、《見事金眸が首取らでは、再び主家には歸るまじ。》と、健氣にも言葉を盟ひ、文角牡丹に別を告げ、行方定めぬ草枕、吾から野良犬の群に入りぬ。

第四回

昨日は富家の門を守りて、頸に眞鍮の輪を掛し身の、今日は喪家の狗となり果て、寢るに窠なく食するに肉なく、夜は辻堂の床下に雨露を凌いで、無躾なる土豚に驚かされ、晝は肴屋の店頭に魚骨を求めて、情知らぬ人の杖に逐立られ、或時は村童に曳かれて、大路に他し犬と爭ひ、或時は撲犬師に襲はれて、藪陰に危き命を拾ふ。さる程に黃金丸は、主家を出でゝ幾日か、山に暮らし里に明かしけるに、或る日いと廣やかなる野原にさし掛りて、行けども〳〵里へは出でず。日さへはや暮れなんとするに、宿るべき木陰だになければ、有繋に心細きまゝに、只管路を急げども、今日は朝より一滴の水だも飲まず、一塊の食も喰はねば、飢餓きこと云はん方なく、苦しさに耐へかねて、霎時路傍に蹲まる程に、夕風肌膚を侵し、地氣骨に徹りて、心地死ぬべう覺えしかば、黃金丸は心細さいやまして、《吾主家を出でしより、到る處の犬と爭しが、曾て屑ともせざりしに、饑てふ敵には勝ち難く、かくては此原の露と消て、鴉の餌となりなんも知れず。……里まで出づれば食物もあらんに、それさへ四足疲れはてゝ、今は如何にともすべきやうなし。噫、云ひ甲斐なき事哉。》と、途方に打呆れ居たる折しも、何處よりか來りけん、忽ち一團の燐火眼前に現れて、高く朧り低く照らし、ふは〳〵と宙を飛び行くさま、吾を招くに等しければ、黃金丸は稍々悟りて、《さては吾が亡親の魂魄、假に此處

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に現れて、吾が危急を救ひ給ふか。あな辱し。》と伏し拜みつゝ、その燐火の行くがまにまに、路四五町も來しと覺しき頃、忽ち鐵砲の音耳近く、燐火は消えて見えずなりぬ。こはそも如何なる處ぞと、四邊を見廻せば、此處は大なる寺の門前なり。訝しと思ふものから、門の中に入りて見れば、こは大なる古寺にして、今は住む人もなきにや、床は落ち柱斜めに、破れたる壁は蔦蘿に纏はれ、朽ちたる軒は蜘蛛の網に張られて、物凄きまでに荒れたるが、折しも秋の末なれば、屋根に生ひたる芽生の楓、時を得顏に色付きたる、其隙より、鬼瓦の傾きて見ゆるなんど、戸隱山の故事も思はれ、尾花丈高く生茂れる中に、斜めにたてる石佛は、雪山に惱む釋迦佛かと偲ばる。……只見れば苔蒸したる石盤の上に、一羽の雉子の、身體に彈丸を受けしと覺しく、飛ぶこともならで苦み居るに、こは好き獲物よと、急ぎ走り寄て足に押へ、已に喰はんと足を掛かれば、忽ち後に聲ありて、《憎き野良犬、其處動きそ。》と、大喝一聲吠え立てたり。黃金丸は打驚き、後を顧りて見れば、眞白なる獵犬の、吾を嚙まんと身を構ふ。黃金丸は少し焦思つて、《無禮なり何奴なれば、吾を野良犬と罵るぞ。》《無禮なりとは汝が事なり。吾が飼主の擊取りし、雉子を漫だりに盜まんとするは、言語に斷えし山狗かな。》《否、こは吾此處にて拾ひしなり。》《否、汝が盜みしなり。見れば頸筋に輪もあらず、汝等如き奴あればこそ、撲犬師が世に殖えて、吾們まで迷惑するなれ。》《許しておけば無禮な雜言、重ねて云はゞ手は見せまじ。》《そは吾よりこそ云ふことなれ。汝等如きと問答無益し。怪我せぬ中に其鳥を、我に渡して疾く逃げずや。》《返す返すも舌長し、折角拾ひし此鳥を、おめ〳〵汝に得させんや。》《這ッ面倒なり、斯してくれん。》と、飛でかゝれば黃金丸も、物々しやと振り拂ひて、又嚙み付くを丁と蹴返し、その咽喉を嚙んとすれば、彼方も去る者身を沈めて、黃金丸の股を嚙む。黃金丸は飢渴に疲れて、勇氣日頃に劣れども又尋常の犬にあらぬに、彼方も中々之に劣らず、互ひに挑鬪ふさま、彼の花和尙が赤松林に、九紋龍と爭ひけるも、かくやと思ふ斗りなり。

先きの程より、彼方の木陰に身を忍ばせ、二匹の問答を聞居たる、一匹の黑猫ありけり。今二匹が嚙合ひはじめて、互ひに負けじと爭ひたる、その隙を見すまして、靜かに忍び寄るよと見えしが、矢庭に捨てたる雉子を咬へて、脫兎の如く逃げ行くを、やゝありて二匹は心付き、南無三してやられしと思ひしが、今更追うても及びもせずと、雉子を咬へて築地をば、越え行く猫の後姿、打ち見やりつゝ茫然と、嚙み合ふ嘴も開いたまゝなり。

第五回

鴟蚌互ひに爭ふ時は、遂に漁夫の獲となる。それと是とは異なれども、吾曹二匹爭はずば、彼の猫如きに侮られて、おめ〳〵雉子は取られまじきにと、黃金丸も彼の獵犬も、是彼齊しく左右に分れて、只管嘆息なせしかども、今更悔いて詮なきこと、漸くに思ひ定めつ。やゝありて獵犬は、黃金丸にうち向ひ、《さるにても御身は、そも何處の犬なれば、斯る處に漂泊ひ給ふぞ。最前より嚙あひ見るに、世にも鋭き御身が牙尖、某如きが及ぶ處ならず。もし彼の鳥猫に取られずして、尙も御身と爭ひなば、吾身は遂に嚙殺されて、雉子は御身が有となりてん。……是を思へば彼の猫も、吾が爲には救死の恩あり。噫、危かりし〳〵。》と、數度嘆賞するに、黃金丸も話を改め、《こは過分なる贊詞かな。さ云ふ御身が本事こそ、なか〳〵及ばぬ處なれと、心私かに敬服せり。今は何をか裏

むべき、某が名は黄金丸とて、以前は去る人間に事へて、守門の役を勤めしが、宿願ありて暇を乞ひ、今かく失主狗となれども、決して怪しき犬ならず。さて又御身が尊名如何に、苦しからずば名乗り給へ。》と、云へば獵穴は打黙頭き、《さもありなんさもこそと、某も疾く猜したり。さらば御身が言葉にまかせて、某が名も名乗るべし。見らるゝ如く某は、此邊の獵師に事ふる、獵犬にて候が、ある時鷲を捉て押へしより、名をば鷲郎と呼ばれぬ。こは鷲を捉りし白犬なれば、鷲白と云ふ心なるよし。元より數ならぬ犬なれども、獵には得たる處あれば、近所の犬ども皆恐れて、某が前に尾を垂れぬ者も無ければ、天下に吾より强き犬は、多くあるまじと誇りつれど、今しも御身が本事を見て、吾が慢心を太く恥ぢたり。そはともあれ、今御身が語られし、宿願の仔細は如何にぞや。》と、問ふに黄金丸は四邊を見かへり、《さらば委敷語り侍らん……》とて、父が非業の死を遂げし事、吾身は牛に養はれし事、それより虎と狐を仇敵とねらひ、主家を出でゝ諸國を遍歴せし事など、落ちなく語り聞かす程に、鷲郎は屢々感嘆の聲を發せしが、やゝありて云へる樣、《その事なれば及ばずながら、某一肢の力を添へん。吾彼の金眸に意恨は無けれど、彼奴猛威を逞うして、餘の獸類を濫りに虐げ、剩さへ饑る時は、市に走りて人間を闘がすなんど、片腹痛き事のみなるに、機會もあらば挫がんと、常より思ひ居たれども、名に負ふ金眸は年經し大虎、吾如何に獵に長けたりとも、互角の勝負なりがたければ、蟲を殺して無法なる、他が塁動を見過せしが、今御身が言葉を聞けば、符を合す互ひの胸中、是より兩犬心を通じ、力を合せて彼奴を狙はゞ、何れの時か討たざらん。》と、云ふに黄金丸も勇み立ちて、《頼もしゝ頼もしゝ。御身已にその意ならば、某又何をか恐れん。これより兩犬義を結び、親こそ異れ此後は、兄となり弟となりて、共に力を盡すべし。某此年頃諸所を巡りて、數多の犬と嚙み合ひたれども、吾が牙に立つもの一匹だになく、いと本意なく思ひ居しに、今日圖らず御身に出逢て、かく頼もしき伴侶を得ること、實に亡父の紹介ならん。鄰に路を照らせし燐火も、今こそ思ひ合はされたれ。》と、獨り感涙に咽びしが、獵犬は霎時ありて、《某今御身と契を結びて、彼の金眸を討たんとすれど、飼主ありては心に任せず。今より吾も頸輪を棄て、御身と共に矢主狗とならん。》と、云ふを黄金丸は押止め、《こは漫なり鷲郎ぬし、吾が爲に主を棄る、その志は辱けれど、これ義に似て義にあらず、却つて不忠の犬とならん。此儀は思ひ止まり給へ。》《いやとよ、その心配は無用なり。某獵師の家に事へ、おさ〳〵獵の業にも長けて、朝夕山野を走り巡り、數多の禽獸を捕ふれども、熟ら思へば、是實に大なる不義なり。縱令ひ主命とは云ひながら、罪なき禽獸を徒らに傷めんは快き事にあらず。彼の金眸に比べては、其の惡五十歩百歩なり。此をもて某、常より此生業を棄てんと、思ふこと切なりき。今日此機會を得しこそ幸なれ、斷然暇を取るべし。》と、云ひもあへず、頸輪を振切りて、其決心を示すにぞ、黄金丸も今は止むる術なく、《かく御身の心定まる上は、某又何をか云はん。幸ひなる哉此寺は、荒果てゝ住む人なく、吾等が爲には好き棲居なり。是より兩犬此處に棲みてん。》と、それより連立ちて寺の中に踏入り、方丈と覺しき所に、疊少し朽ち殘りたるを選みて、其處をば棲居と定めける。

第六回

怨て黄金丸は鷲郎と義を結びて、兄弟の約をなし、此古寺を棲居となせしが、元より養ふ人

なければ、食物も思ふにまかせぬに、心ならずも鷲郎は、慣し業とて野山に獵し、小鳥など捉り來ては、漸く其日の糧となし、こゝに幾ひ日を送りけり。

或日黄金丸は、用事ありて里に出でし歸途、獨り畑路を辿り往くに、只見れば彼方の山岸の、野菊あまた咲き亂れたる下に、黄なる獣眠り居れり。大さ犬の如くなれど、何處やら吾が同種の者とも見えず。近づくまゝに尚よく見れば、耳立ち口尖りて、正しく是狐なるが、其尾の尖の毛抜けて醜し。此時黄金丸思ふ樣、《嚮に文角ぬしが物語に、聽水と云ふ狐は、曾て吾が父月丸ぬしの爲に、尾の尖咬切られて無しと聞きぬ。今彼の狐を見るに、尾の尖斷離れたり。恐らくは聽水ならん。あな、有難や感謝や。此處にて逢ひしは天の惠みなり。將一噬みに・・・》と思ひしが、有繋義を知る獣なれば、眠込みを噬まんは快からず。且は誤まりて他の狐ならんには、無益の殺生なりと思ひ、稍近く忍びよりて、一聲高く《聽水》と呼べば、件の狐は打ちゝ驚き、眼も開かず其儘に、一間ばかり蹴飛んで、慌しく逃げんとするを、逃がしはせじと黄金丸は、繼叫んで追駈るに、彼方の狐も一生懸命、畠の作物を蹴散らして、里の方へ走りしが、只在る人家の外邊に、結ひ繞らしたる生垣を、閃と斗り跳り越え、家の中に逃げ入りしにぞ、續いて黄金丸も垣を越え、家の中を走り抜けんとせし時、六歳ばかりなる稚兒の、餘念なく遊び居たるを、過失て蹴倒せば、忽ち啞と泣き叫ぶ。其聲聞き付て、稚兒の親なるべし、三十ばかりなる大男、裏口より飛で入しが、今走り出でんとする、黄金丸を見るよりも、さては此奴が噬みしならんと、思ひ僻めつ大に怒て、有合ふ手頃の棒おつとり、黄金丸の眞向より、骨も碎けよと打ち卸すに、さしもの黄金丸肩を打たれて、《叫》と一聲叫びもあへず、後に撲地と倒るゝ處を、尚續けさまに打ちたゝかれ、やがて太き麻繩もて、犇々と縛められぬ。其間に彼の聽水は、危き命助かりて、行方も知らずなりけるに、黄金丸は無念に耐へかねゝ、齒切して吠え立つれば、《おのれ人間の子を傷けながら、まだ飽きたらで猛り狂ふか。憎き山犬よ、今に目に物見せんず。》と、曳立て〳〵裏手なる、槐の幹に繋ぎけり。

不俱戴天の親の仇、たまさか見付けて討たんとせしに、その仇は取り逃がし、剰へ其身は、僅少の罪に縛められて、邪見の杖を受る悲しさ。さしもに猛き黄金丸も、人に抗ふことならねば、ぢつと無念を抑ふれど、悔し涙に地は掘れて、足踏に木も動搖ぐめり。

却説く鷲郎は、今朝より黄金丸が、用事ありとて里へ出でしまゝ、日暮れても歸り來ぬに、漸く心安からず。幾度か門に出でゝ、彼方此方を眺れども、それかと思ふ影だに見えねば、萬一他が身の上に、怪我はなきやと思ふものから、他元より尋常の犬ならねば、無差と撲犬師に打たれもせまじ。さるにても心許なやと、頻りに案じ煩ひつゝ、虚々と已れも里の方へ彷徨ひ出でゝ、或る人家の傍を過りしに、不圖聞けば、垣の中にて怪き呻き聲す。耳傾けて立聞けば、何とやらん黄金丸が聲音に似たるに、今は少しも逡巡はず。結ひ繞らしたる生垣の穴より、入らんとすれば生憎に、枳殼の針腹を刺すを、辛うじてくゞりつ。聲を知るべに忍びよれば、太き槐の樹に括り付けられて、蠢動き居るは正しくそれなり。鷲郎はつと走りよりて、黄金丸を抱き起し、耳に口あてゝ、《喃、黄金丸、氣を確に持ちねかし。吾なり、鷲郎なり。》と、呼ぶ聲耳に通じけん、黄金丸は苦しげに頭を擡げ、《こは鷲郎なりしか。嬉しや。》と、云ふさへ息も絶々なるに、鷲郎は急ぎ繩を噬み切りて、身體の痍を甜りつゝ、《如何にや黄金丸、苦

しきか。そも何として此狀態ぞ。）と、且つ劬はり且つ尋ぬれば、黄金丸は身を震はせ、かく縛められし事の由來を、言葉短に語り聞かせ、《兎角は此處を立ち退かん。見付けられなば命危し。》と、云ふに鷲郎も心得て、深痍になやむ黄金丸を吾が背に負ひ、元入りし穴を拔け出でゝ、吾が棲居へと急ぎけり。

第七回

鷲郎に助けられて、黄金丸は漸く棲居へ歸りしかど、これより身體痛みて絶え難く、加之右の前足骨挫けて、物の用にも立ち兼ぬれば、口惜しきこと限りなく、《吾此まゝに不具の犬とならば、年頃の宿願いつか叶へん。此宿願叶はずば、養親なる文角ぬしに、又合すべき面なし。》と、切齒して掘口說くに、鷲郎もその心中推しやりて、共に無念の涙に呉れしが、《さな嘆きそ。世は七顚八起と云はずや。心靜かに養生せば、早晩は癒ざらん。某身邊にあるからは、心丈夫に持つべし。》と、或は罵り或は慰まし、甲斐々々しく介抱なせど、果敢々々しき驗も見えぬに、只管心を焦思ちけり。或る日鷲郎は、食物を取らん爲に、午前より獵に出で、黄金丸のみ寺に殘りてありしが、折しも小春の空長閑く、斜庇を洩れてさす日影の、拂々と暖きに、黄金丸は床をすべり出で、緣端に端居して、獨り轡陶に打ち呉れたるに、忽ち天井裏に物音して、救助を呼ぶ鼠の聲かしましく、やがて黄金丸の傍らに、一匹の雌鼠走り來て、股の下に忍び入り、宛然救助を乞ふものゝ如し。黄金丸はいと不憫に思ひ、件の雌鼠を小脇に藏ひ、そも何者に追はれしにやと、彼方を佶と見やれば、破れたる板戸の陰に身を忍ばせて、此方を窺ふ一匹の黑猫あり。只見れば去る日鷲郎と、かの雉子を爭ひける時、間隙を狙ひて雉子をば、盜み去りし猫なりければ、黄金丸は大に怒りて、一飛びに喰てかゝり、慌てゝ柱に攀昇る黑猫の、尾を咬へて曳きおろし、踏躪り咬み裂きて、立在に息の根止めぬ。

此時雌鼠は、恐る〳〵黄金丸の前へ這ひ寄りて、慇懃に前足をつかへ、數度頭を垂れて、再生の恩を謝すほどに、黄金丸は莞爾と打ち笑み、《爾は何處に棲む鼠ぞ。又彼の猫は如何なる故に、爾を傷けんとはなせしぞ。》と、尋ぬれば、鼠は少しく膝を進め、《さればよ殿聞き給へ。妾が名は阿駒と呼びて、此天井に棲む鼠にて侍り。又此猫は烏玉とて、此邊に棲む無賴猫なるが、兼てより妾が仲間を、喰ひ荒すこと一方ならず、今しも妾が巢に忍び來て、無殘にも妾が夫を嚙みころし、妾を奪ひ去らんとするより、逃げ惑うて遂にかく、殿の枕邊を驅がせし、無禮の罪は許したまへ。》と、涙ながらに物語れば、黄金丸も不憫の者よと、件の鼠を慰めつゝ、彼の烏玉を尻目にかけ、《さりとては憎き猫かな。這奴はいぬる日吾が鳥を、盜み去りしことあれば、吾又意恨なきにあらず。年頃なせし惡事の天罰、今報い來て斯く成りしは、實に氣味よき事なりけり。》と、云ふ折から彼の鷲郎は、小鳥二三羽嘴に咬へて、獵より歸り來りしが、此體態を見て、事の由來を尋ぬるに、黄金丸はありし始末を落なく語り、鷲郎も其の功勞を稱贊しつ、《かくては御身が疾病も、遠からずして癒ゆべし。》など、云ひて共に打ち興じ、やがて持ち來りし小鳥と共に、烏玉が肉を裂きて、思ひのまゝにこれを喰ひぬ。

さて此時より彼の阿駒は、再生の恩に感じけん、朝夕黄金丸が傍に侍きて、何くれとなく忠實に働くにぞ、黄金丸も其厚意を嘉し、情を掛て使ひけるが、もと此阿駒と云ふ鼠は、去る香具師に飼はれて、種々の藝を仕込まれ、緣日の見世物に出し身なりしを、故ありて小屋を忍出で、今此古刹に住むものなれば、折々は黄

金丸が枕邊にて、有漏覺えの舞の手振、又は綱渡り籠拔けなんど、昔取たる杵柄の、覺束なくも奏でけるに、黄金丸も興に入りて、病苦も爲に忘れけり。

第八回

黄金丸が病に伏してより、やゝ一月にも餘りし程に、身體の痛みも失せしかど、前足未だ癒えずして、歩行もいと苦しければ、心頻りに焦思つゝ、《此儘に打ち過ぎんには、遂に生れもつかぬ跛犬となりて、親の仇さへ討ちがたけん。今の間によき藥を得て、足を癒さでは叶ふまじ。》と、其藥を索るほどに、或日鷲郎は慌しく他より歸りて、黄金丸に云へるやう、《やよ黄金丸喜びね。某今日好き醫師を聞得たり。》と云ふに、黄金丸は膝を進ませ、《こは耳寄りなることかな。その醫師とは何處の誰ぞ。》と、連忙はしく問へば、鷲郎は答へて、《さればよ。某今日里に遊びて、古き友達に邂逅ひたり。其犬語るやう、此處を去ること南の方一里ばかりに、木賊が原と云ふ處ありて、其處に朱目の翁とて、貴き兎住めり。此翁若き時は、彼の柴刈りの爺が爲に、仇敵狸を海に沈めしことありしが、其功によりて月宮殿より、靈杵と靈臼とを賜はり、そをもて萬の藥を搗きて、今は豐に世を送れるが、此爺が許にゆかば、大概の獸の類の疾病は、癒えずと云ふことなしとかや。其犬も去る日村童に石を打たれて、左の後足を破られしが、件の翁が藥を得て、その痍頓に癒しとぞ。されば吾直ちに往きて、藥を得て來んとは思ひしかど、御身自ら彼が許にゆきて、親しく其痍を見せなば、なほ便宜よからんと思ひて、吾は故らに行かで止みぬ。御身少しは苦しくとも、全く歩行出來ぬにはあらじ。明日にも心地よくば、試みに往きて見よ。》と、云ふに黄金丸は打喜び、《そは實に嬉しき事かな。さればかく貴き醫師のあることを、今日まで知らざりし鈍ましさよ。兎角は明日往きて藥を求めん。》と、海月の骨を得し心地して、その翌日朝未明より立ち出で、教へられし路を辿りて、木賊が原に來て見るに、櫨楓なんどの、色々に染めなしたる木立の中に、柴垣結ひめぐらしたる草庵あり。丸木の柱に木賊もて檐となし、竹緣清らかに、筧の水も音澄みて、いかさま由緒ある獸の棲居と覺し。黄金丸は柴門に立寄りて、丁々と訪へば、中より《誰そ。》と聲して、朱目自ら立出づるを、見れば耳長く毛は眞白に、眼紅に光ありて、一目尋常の兎とも覺えぬに、黄金丸はまづ恭しく禮を施し、さて病の由を申聞えて、藥を賜はらんと云ふに、彼の翁心得て、まづ其痍を打見やり、暫時甜りて後、何やらん藥をすりつけて、さて云へる樣、《吾が此藥は、畏くも月宮殿の嫦娥、親ら傳授したまひし靈法なれば、縱令如何なる難症なりとも、頓に癒ること神の如し。今御身が痍を見るに、時期後れたればやゝ重けれど、今宵の中には癒やして進ずべし。兎も角も明日再び來たまへ、聊か御身に尋ね度事もあれば……》と、云ふに黄金丸打よろこび、やがて別を告げて立歸りしが、途すがら只在る森の木陰を過りしに、忽ち生茂りたる木立の中より、兵と音して飛び來る矢あり。心得たりと黄金丸は身を捻りて其矢をば、發止と牙に咬みとめつ、矢の來し方を佶と見れば二抱へもある赤松の、幹兩股になりたる處に、一匹の黑猿昇り居て、左手に黑木の弓を持ち、右手に青竹の矢を採りて、なほ二の矢を注へんとせしが、黄金丸が睨め付し、眼の光に恐れけん、その矢も得放たで、慌しく枝に走せ昇り、梢傳ひに木隱れて、忽ち姿は見えずなりぬ。かくて次の日になりけるに、不思議なる故搆えたる足、朱目が言葉に露たがはず、全く癒えて常に異ならねば、黄金丸は雀躍して

喜び、急ぎ禮にゆかんとて、些ばかりの豆滓を携へ、朱目が許に行きて、全快の由申聞え、言葉を盡して喜悅を陳べつ。《失主狗にて思ふに任せねど、心ばかりの藥禮なり。願くば納め給へ。》と、彼の豆滓を差し出せば、朱目も喜びて之を納め、やゝありて云へる樣、《昨日御身に聞き度きことありと云ひしは、餘の事ならず。》と、云ひさして容をあらため、《某幾歳の劫量を歴て、稍々神通を得てしかば、自ら獸の相を見ることを覺えて、十に一も誤なし。今御身が相を見るに、世にも稀なる名犬にして、しかも力量萬獸に秀でたるが、遠からずして、拔群の功名あらん。某此年月數多の獸に逢ひたれども、御身が如きは曾て知らず。思ふに必ず由緒ある身ならん。その素性聞かまほし。》とありしかば、黄金丸少しもつゝまず、おのが素性來歴を語れば、朱目は聞いて膝を打ち、《それにて吾も會得したり。總じて獸類は胎生なれど、多くは雌雄數匹を孕みて、一親一子はいと稀なり。さるに御身は、只一匹にて生れしかば、其力五六匹を兼ねたり。加之牛に養はれて、牛の乳に育まれしかば、又牛の力量をも受得て、蓋し尋常の犬の猛きにあらず。さるに如何なればかく、鈍くも足を傷られ給ひし。》と、訝り問へば黄金丸は、《これには深き仔細あり。元來某は、彼の金眸と聽水を、不俱戴天の仇と狙うて、常に油斷なかりしが、去る日件の聽水を、途中にて見付しかば、名乘りかけて討たんとせしに、却て他に方便られて、遂にかゝる不覺を取りぬ。》と、彼のときの事具に語りつゝ、《思へば憎き彼の聽水、重ねて見當らば只一咬みと、朝夕心を配れども、彼も用心して更に里方へ出でざれば、意恨を返す手掛りなく、無念に得堪へず候。》と、云ひ畢りて切齒をすれば、朱目も點頭きて、《御身が心は吾とく猜しぬ。さこそ無念におはすらめ。さりながら黄金ぬし。御身實に他を討たんとならば、吾に好き計略あり。及ばぬまでも試み給はずや。凡そ狐狸の類は、其性質至て狡猾く、猜疑深き獸なれば、愁いに企みたりとも、容易く捕へ得つべうもあらねど、其の好む處には、君子も迷ふものと聞く。他が好むものをもて、釣り出して罠に落さんには、さのみ難きことにあらず。》と云ふに、黄金丸は打喜び、《その釣り落す罠とやらんは、兼てより聞きつれど、某未だ見し事なし。如何にして作り候や。》《そは斯樣々々にして拵へ、それに餌をかけ置くなり。》《して他が好む物とは。》《そは鼠の天麩羅とて、肥太りたる雌鼠を、油に揚げて掛けおくなり。さすればその香氣他が鼻を穿ちて、心魂忽ち空になり、吾を忘れて大概は、その罠に落つるものなり。是よく獵師のなす處にして、かの狂言にもあるにあらずや。御身これより歸りたまはゞ、まづその如く罠を仕掛て、他が來るを待ち給へ。今宵あたりは彼の狐の、其香氣に浮かれ出でゝ、御身が罠に落ちんも知れず。》と、懇切に教へしかば、《こは好きことを聞き得たり。》と、數度喜び聞え、尙四方山の物語に、時刻を移しける程に、日も山端に傾きて、塒に騷ぐ群鳥の、聲かしましく聞えしかば、《こは意外に長坐しぬ。宵したまへ。》と會釋しつゝ、吾が棲居をさして歸りぬ。其途すがら例の森陰まで來たりしに、昨日の如く木の上より、矢を射かくるものありしが、此度は黄金丸肩をかすらして、思はずも身を沈め、大聲あげて、《おのれ今日も狼藉なすや、引捕へてくれんず。》と、走り寄て木の上を見れば、果し一昨日の猿にて、黄金丸の姿を見るより、又も木葉の中に隱れしが、吾に木傳ふ術あらねば、追駈けて捕ふることもならず。憎き猿めと思ふのみ、そのまゝにして打棄てたれど、《さるにても何故に彼の猿は、一度ならず二度までも、吾を射んとはしたりけん。吾等猿

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com